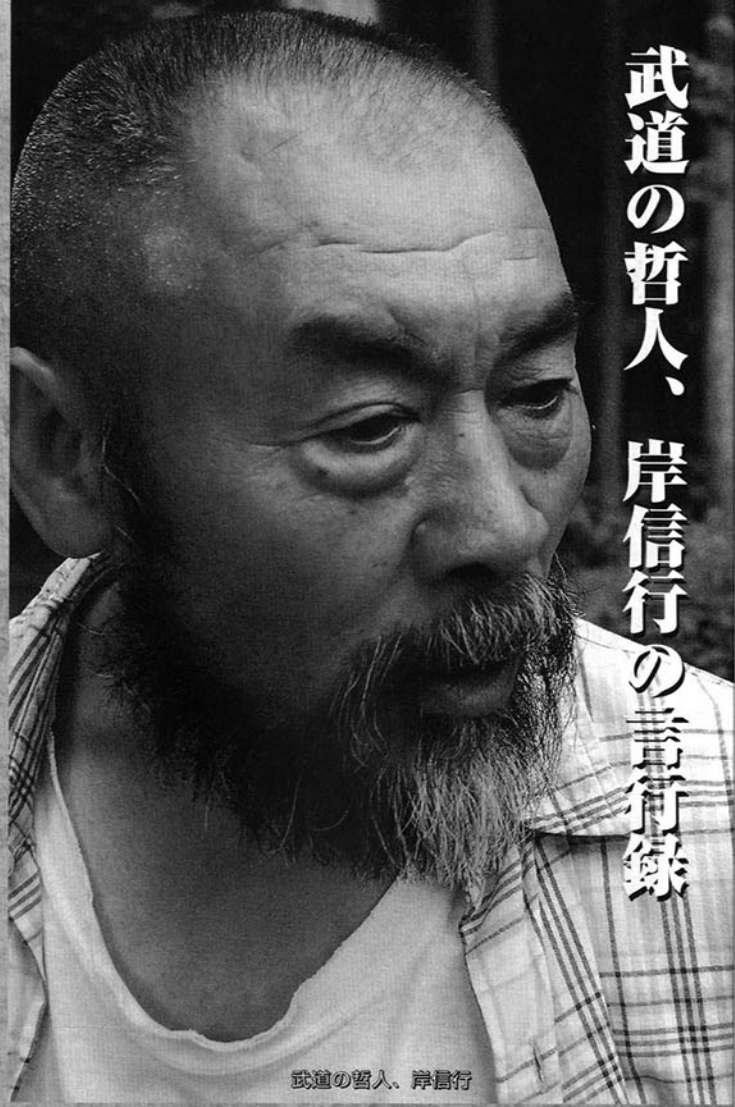


武道の哲人、岸信行の言行録



武道の哲人、岸信行

名もなき空手 日本に空手の源流を求めて

写真・文 不動武

るよ」

岸信行。この空手家は日本の山形県新庄市に実在する。日本の東北地方に位置する山形を代表する月山。この月山に、冬は日本海を越えてロシアからの大寒風が吹きつける。その頂上には40mの雪が積もり、豪雪に下敷かれる草は蓋が曲がって尚も育つという。この北国の草の魂、生命力。その雪深い熾烈な環境の中、貧しい農家に岸信行は生を受けた。苛酷な少年時代を生き、空手の氣に目覚めて故郷を後にし、極真空手創始者である空手王大山倍達の内弟子となった。台湾、ニューヨーク、イタリア、ルーマニア、南米、さまざまな国を空手着一つで実戦行脚した。しかし、その男は世の中に「実戦空手ブーム」が沸き起こった時には組織から離れ、一人の無名空手家としての人生を歩み始めた。

「拳一筋」の人生。ニューヨークや様々な都市に残る空手家岸信行の伝説。やがて世界でただ一人の老いた母のため、ニューヨークで栄えつつあった道場を去り、男は生まれ故郷に戻った。その母がこの世を去った後も、山形の故郷の村でひとり拳を磨き続けた。そこにあるのは「名もなき空手」。

岸信行が日本に戻った頃、岸道場には看板すら無かった。人は訊ねた。

「道場に看板を掛けないんですか？」
岸は答えた。
「どうしても俺に会う必要があれば、来る人は捜しても来

るよ」
そして20年。その言葉は現実のものとなった。日本国内においては、うつ等の心療的障害、身体の問題、家庭内暴力、暴力事件、家庭内の不和等、様々な問題を抱えた人々が岸信行の空手の伝説を聞き、岸信行の空手を頼って全国から訪れた。そして平成24年の夏、世界最先端の大都市ニューヨークや南米トリニダード・トバゴから外国人空手家達約二十名が山形県新庄市の「名もなき空手」の岸道場を訪れた。そして、岸信行が「空手の理想郷」を夢見て20年の長きに渡り建築を進めた「空手の聖地」、山形県と秋田県の県境に位置する奥羽山脈の奥地の岸空手「山の道場」に人種を超えて世界の空手の気合いがこたえました。

平成25年には、さらに様々な国から世界の人々が集つという。恐らくは年々世界に向かって、国内に向かって、その輪を広げることだろう。岸信行が企画したものでない。岸信行の空手世界行脚の結果、各国で自然発生して、この聖地に集結するのである。「武道の源流」を求めて。

今回はその「山の道場」での修行を通して、著者が岸氏から伺った「空手家岸信行の人生哲学」をそのままを記す。現代に広まった競技の空手とはまた趣を異にする「自然派の空手」が姿を現す。

◆名もなき空手

俺のニューヨーク時代のいろいろな話を聞いたりして、ニューヨークで空手道場をやっている本間雅彦という空手家がある。本間が俺のことを「先生だ」と言い、俺が「本間は岸の弟子だ」と思うのなら、それで空手家としての関係は十分だ。俺は岸道場の支部を作る気もないし、空手というのは人それぞれのもので、流派というものは不自然だと思ってる。また流派で人を区別しようと思わない。ただ「先生が誰か」ということで表札はあって良い。だから、本間はニューヨークで「本間道場」というのを開いている。俺は「岸道場」だしな。本間の道場は俺がニューヨークで岸道場をやっていた場所から歩いて5分位の場所。道場の中に俺の写真を貼っているらしいが、別に岸道場の支部ではない。

岸空手の支部長を作る気はないが、俺の弟子だというなら、第一条件は人間性だ。

「人間性の悪い者は空手も悪い」

俺はそう信じている。運動神経でも選手成績でもない。一言で言えば「誠実な人間かどうか」だ。真面目でなければ話にならない。技や力は鍛練するしかない。武術の術が「行」という言葉の中に「求」の意味が入ってできているように、実際に空手を求めて行う者でなければ空手家にはなれない。本間は人間性が良い。もう昔、20世紀に俺が話したことを書いた記事が載った本(本誌1998年2月号)を本間が読んで「これが教科書だ。少しでもましな人間になりたい」と言って空手で自分を鍛えてきたらしい。その本間が平成24年の春に「この夏にアメリカの道場生を二十名程連れて山形の岸道場へ行って稽古したい」と言い始めた。アメリカの失業率や経済状態を聞いていたか



ニューヨークに本間道場を築く本間雅彦

ら、「大丈夫なのか？」と思っていたが、実際に夏には23歳から43歳迄、約二十名も連れてニューヨークからやって来た。本間に「お前、皆を洗脳でもして連れてきたのか？」と言ったが、道場生達が「自分達の師匠の師匠に会いたい」と言っただけで来たらしい。本間の誠実な人間性が慕われての結果だな。俺は何も特別なことはしてやれなかったが、道場の他、皆で羽黒山や月山へ行った。山の道場へ行き、山奥の隠れた桂の大樹を求めて急な山肌を歩き、皆で普段着のまま空手を稽古し、皆で食べた。全て大自然の中でやった。皆は大自然の空手そのものに感動し、道場から帰る前夜、パーテ

イで彼等は泣いていた。別に俺が偉いわけでも、俺の空手が凄いわけでもない。空手そのもの、そして日本の大自然と一体化した空手に彼等は感動したんだな。俺はニューヨークで20年も暮らしたから、世界の大都市ニューヨークに潜む「闇と病み」を知っている。それがどれだけ直接、間接に本間の道場生達やアメリカ人を苦しめ悩ませているかも俺はわかる。大都会では「人間、先立つものは金」と言っただけで、自分の心を曲げて何とか金を得てみる。そうして金を得てみて、それで幸せかというところでもないのよ。アメリカ等の世界の最先端と言われる国は特にそうだよ。日本の本当の空手には、世界の最先端の大都市の闇と病みを癒しぶつとばす力がある。彼らはそれに触れて感動したんだな。俺はそう信じてる。

フエアウエルパティの夜。本間道場の皆が泣いていた。俺に感謝の言葉と感謝の桶をくれた本間に、俺は「泣くな本間！ 皆を頼むぞ！ 日本を背負って行け！」と言って気合を入れた。俺が本間に「日本を背負って行け！」と言ったのには意味がある。日本の武道の指導者は少なからず、アメリカに行くときアメリカに染まってしまう。悪い意味でのアメリカナイズだな。日本とアメリカは違う。それが「国際」「国」の「際」ということだ。そこでのマナーの調節は必要だ。それは林檎の皮のように皮一枚は紅くなくても、中身は白い「日本のまま」で良い。しかし、アメリカナイズされて、トマツトのように皮も中身もその国と同じ色に染まってしまう者もいる。アメリカ人は日本の空手にそんなものを求めていない。日本の大自然を源流として日本で培われた武道、そのままの空手を必要としている。だからこそ本間雅彦は一人の空手の伝道師として日本を背負って行く必要がある。わかりにくい表現だろうが、ニューヨークでは優れた一流がデタラメに徹した三流の人間は生きていけないが、二流の人間は生きて行けない。本間には一流になって貰いたい。大勢の外国人達が俺の道場に来てくれたことは嬉しかったけれども、俺だけじゃできなかった。彼らが泊る所を用意してくれた同級生の柿崎豊行君や山の道場まで食糧を届けてくれた真室川の太友さん夫妻、新庄の徳州会病院で看護部長を務める大友絹子さん、郷土の方々のお陰で彼等を迎えることができた。この絹子さんのご主人の光広さんは先頃亡くなられたけれども、俺にとっては岸道場の目には見えない後援会の永久後援会長さんだよ。この光広さんが死ぬ前に、奥さんに言われたらしいよ。「俺は岸道場で空手の稽古ができた、最後の5年間が一番幸せな時だった」と。あの東日本大震災の時、俺が「電気もつかないし、車で来るのも大変だから、しばらくは道場を休みにしよう」と言ったら、この太友さん達老人グループが「こんな大変な災害があっ

た時に、その上、俺達の楽しみまで取らないでくれ！」と言い始めて、俺達は道場にローソクを立てて稽古したんだよ。俺はこれからも、そうやって老人にも女性にも喜んでもらえる「死ぬまでできる空手」を伝えて行きたいね。本間はまた次の夏もニューヨークから道場生達を連れてやってくるらしい。ロンドンやスペイン、南米からも来るという話がある。俺は大それたことはできない。ただありがたいことに、柿崎君が木を製材して山の道場の床を上げる協力をしてくれると言っている。今度、彼ら来るまでに、山の道場を大きくして、ローソクの灯しかない夜の山の道場にニューヨークカー達を泊めてやるつもりだ。大都会で疲れた彼らを自然に戻してやるんだ。俺も俺の仲間達も人生は終盤に入っている。空手に生きた俺達の人生でこ



岸信行が海外の道場生に護身術の一手を教える



「山の道場」は広大な、大木に海外の空手家一人一人が手刀を打ち込む



山形県新庄市にある岸道場における鍛錬

れからの若い人々に何か遺してあげることができたら最高だと思っている。

（岸信行先生を訪ねて）記・本間雅彦

「東京から山形まで車で移動という計画でしたので、生徒の中には福島県の放射能を気にしている者もいました。しかし、最終的にはそれを理由に岸道場での稽古を断念する者は一人もいませんでした。今回生徒達と合宿に参加して何か強い「力」を感じました。それが「空手」の力なのか、「縁」の力なのか、岸信行先生の「人間磁石」なのかは自分にはわかりません。

日本に行く前は、岸先生は毒舌だし、スルメみたいに噛めば噛む程味の出る方だから、生徒達が初対面で先生のことをどれだけ理解できるか一抹の不安がありました。しかしそれは全くの杞憂でした。生徒達は先生の迫力に「この人はただ者ではない」と直ちに察知しようです。ほとんどの生徒が日本は初めてでしたが、岸先生、道場生の皆様、新庄市や最上郡の皆様が大歓迎していただいたお陰で一様に「人生で最高の経験ができた」と言っていました。生徒達のあんなに輝いた顔は見たことがありませんでした。そして皆が岸先生に鍛えられたお陰で帰って来てからも道場の士気が高まりました。岸先生は空手の技は基本に忠実。そして生き方も基本に忠実だと思います。空手への情熱、信念は半端じゃないです、今時あれ程義理人情に厚い方はめったにいないでしょう。自分にとっては空手の師であり、空手の親父であり、人生の指標です」

◆ESQ&

道場生の稽古の無い日は、この山の道場へ行って稽古し、瞑想し、自然との融和を試みる。ここは俺がアメリカにいた

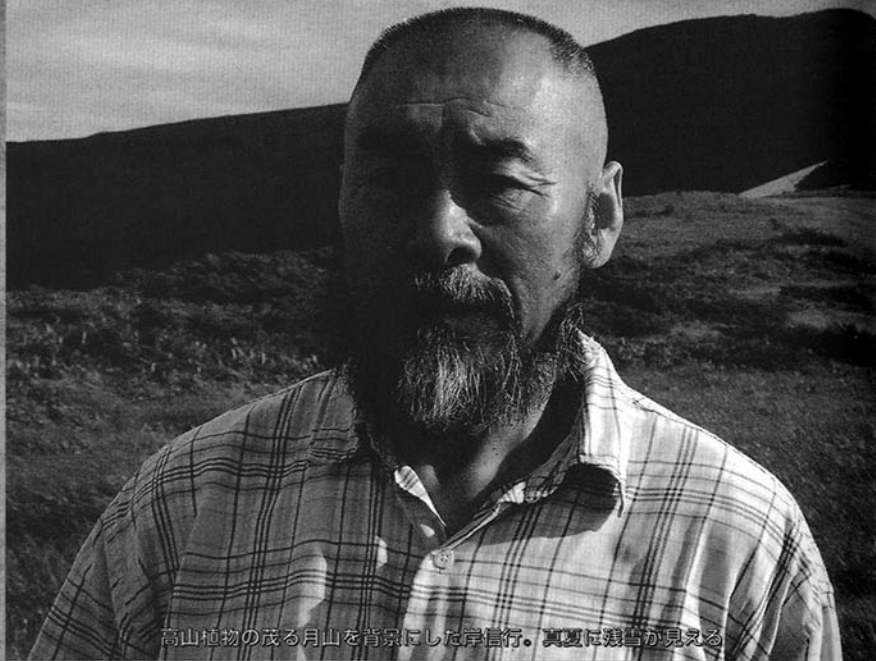
時、アップ・ステイト・ニューヨークに作るうとしていた「カラテ・ヴィレッジ（空手村）」の雛型だ。空手の源流は日本だという。だけれども、空手の源流は日本の大自然だよ。だからね、俺が作りた空手の理想郷、アルカディア、「カラテ・ヴィレッジ」は樹木の息遣い、星の声で聞こえるような場所

所でないとはダメなんだ。また、平らな板の上ではわからない空手の足の裏の技や、立ち方の意味が山肌ではわかる。大都會の喧嘩が生み出した幻がここでは消えて、自然の中の人間に戻る。人間が蘇る。動物達と対等だ。山の道場へ行くとな、カモシカが道場の近くの樹木の皮をはぎ取っていたりする。カモシカの「ここからは私の場所」ってアピールだろう。月の輪熊が遠くで鳴く。「ここまでは来ないで」って伝言だな。樹木を一発だけ叩いて爪跡で警告を残してあることもある。不思議なものだね、そうやって山の道場で暮らしていると、山で栗を拾っているも「全部は町に持って帰っちゃダメだな」と思っ

と「あの人間もそう悪い奴じゃないな。敵じゃないらしい」と思う。人間はよく動物を「畜生」と言ってる馬鹿にするけれども、動物に失礼な話だよ。人間のようにな意味ないさかいても起こさないし、節度を弁えて生活しているもんだよ。俺は全ての生き物は兄弟だと思ふよ。



羽黒山の頂上にて記念撮影



高山植物の茂る月山を背景にした岸信行。真夏に鎌倉が見える

自然への謙虚さと用心抜きに空手は成り立たない。それを感じるこのでできるこの田舎の大自然の道場に、平成24年の夏は海外から大勢、空手家達がやってきて、一緒に空手の稽古ができた。俺の思う空手の理想郷「カラテ・ヴィレッジ」に一歩近づいた気がする。

俺はね、この大自然に囲まれた山の道場で、生きることに疲れた人間、悩みを抱えた人間、病で苦しむ人間、学校へ行くのが嫌な子供達を元気にする、そんな空手をやりたいんだ。また老境となり、死期を迎えた人が人生の最後に空手を通して生きていく喜びを得る場所になってほしい。そういう人間を弱者だ、異常だという人もいるかも知れないけど、そんなことないよ。不自然の中で苦しんでいる被害者みたいなもんだよ。「うつ病が

何百万円で一人預かって欲しい」と頼まれたこともあったけれど、それは、どうもビジネスの匂いがしたから断ったけれどもね。20年前、この道場を作ろうとした時は随分と変な目で見られたもんだよ。他の人に「あんな場所、ただでも要らねえ」とか言われて、笑われてね。変人扱いされたこともあるよ(笑)。それが、少しずつ作っている内に、自分の空手の稽古、瞑想の場所となり、人生に疲れたり、鬱になっている人間を癒してやる場所になり、その内、俺の知人の空手家も訪ねてくるようになった。そして今は海外から「人間を取り戻すための空手の修行の場」としてやってくるようにもなった。今、考えてみると、お袋が老衰で倒れて、世界のと真ん中のニューヨークから戻って、故郷の山の中にこんな

道場を作ることになったのも天の導きだったかも知れないね。

◆三百六十日の桜の樹

皆、桜と言ったら、桜の花を思い浮かべるだろう。だけれどもね、桜の花は1年の内に5日程しか咲いてないんだよ。そして桜の花が散ったら誰も見向きもしなくなる。でもね、日数から言ったら、花の咲かない360日の桜の方が本当の桜なんだ。人生でも華やかな時とそうでない時、灰や泥のような時さえあるだろう。花が散れば周囲に集まっていた人間が光より速く去って行く光景を目にすることもあろう。「美しい」と桜の花を賞賛していた人々が掌を返したように去っていく。淋しいことだろう。でも、桜の花よりも桜の樹のように、花が散って人が去った時にこそ、堂々と大地に根を張って太い幹と枝で天を仰ぐ、そういう桜の樹のような人間でいたいね。俺が人生に例えて思う桜の樹の見事さはそういうところ。

「花が散っちゃいました。もう誰も見てくれません。だからもう倒れませぬ」。そんな情けな

い桜の樹は無いだらう。花が散った桜の樹は表面には見せず、その樹の中で命を真赤に燃やして戦いを続けている。そして桜は次の春にもまた花を咲かす。しかも、もっと立派な桜の樹になってね。桜の花を人が愛でようが愛でまいが、桜にとったら知ったことじゃない。

若くして社会的名声を得た人間は、それを失うと自分で人生の落ち目と考える。再び社会的名声を得ようともがく。散った花びらを拾い集めて、また自分の枝に飾ろうとさえる。そして、中には絶望して自殺する人間も少なくない。そ



岸信行からの教え「本間、お前は一流になれ！」

中で、雨が降っても、嵐が来ても、立っててくれ」と願う。桜の花の散り際を人は潔いというけれども、潔いのは花ばかりじゃないんだ。桜の花に別れを告げて、明日を指して根と幹と枝になって力強く生きていく桜の樹こそ潔いんだ。

◆過去の失敗を抛り所にする

桜の花の咲くのはただ5日程。その5日程の過去の栄光を心の抛り所にする。「あの栄光をもう一度」となって失敗する。逆に「過去の自分の不幸や失敗」を心の抛り所にして、「もう二度とあの失敗を繰り返すまい」と誓えば人間の心は安定したものとなる。「落ち目の三度笠」ではないけれども、過去にもはやされたい人間が、所謂、落ち目になった時、溺れてもがくような光景を観る。やたら「まだ俺は強い、俺には力がある」「俺は過去にスターだったんだ」「俺を見放した奴らを見返してやる」と力んでみせる。無理に豪放ぶって見せる。虚勢を張る。ますます泥沼だ。俺は過去に栄光なんて感じたことがないから、失敗を反省するばかりだね。よく「小さな失敗にこだわらな！ 次へ行こう！」と豪放ぶって言う人間がいるが、俺はそうは思わない。「小さい失敗にこだわられよ！ 馬鹿野郎！」と思う。他人を傷つけておいて、「過ぎたことです」って「お前が言うな！ この馬鹿！」と思う。小さな失敗でも、「もう二度と繰り返さない」。そういう心がけが人生を確固たるものにする。過去の失敗を捨て置いて、次から次から失敗を重ねる人間には、やがて大きなツケが回ってくる。一つ一つ、しっかりと学ぶんだ。

人生、成功からは学べないものだよ。俺は親父の手伝いで土建屋をやってね。橋掛け工事なんかも手伝っていたからわかるけれども、建築物でも小さい部分

すっかりしていなければ、全体としての強度は保てない。神経質なまでに拘っている人間が弱々しく見えて実は強い。本当に強い人間は裏は内面が物凄くデリケートだったりする。豪放ぶって傍若無人な人間は、一時期は調子に乗って勢い良く見えるかも知れないが、必ず失敗の憂き目を見る。人間は小さなことに対する反省や拘りが大切だ。ただ、その反省というところにもやはり節度はある。同じ所を何度も繰り返して悩み、自身を内部から崩壊させて行くような反省の仕方はダメだ。本人が大真面目のつもりでいても、悩んで心も体もガタガタになる。それでは何にもならない。考えてみる、太陽は生物にとつてありがたい存在だよ。だけれども、太陽を見続けていたら失明する。痛みを十分感じるまで反省したら、次はその反省を建設的な行動に変えることが必要だよ。過去の失敗を踏まえ、力強くまっすぐ前を向いて生きてこそ意味のある反省だよ。

生きていけば、事故、事件、災害、いろいろな事情で、脳も心も狂いそうになることがあるよ。何かの失敗があつて、自分自身の至らなさを考え、何年間も四六時中自責の念に襲われる人もいる。俺の知っている人にもそういう男がいた。その男は自分が狂いそうになって「このままでは自分がダメになる」という考えにも立たない人間になる」という考えに行き着いたんだな。そこで考えを切り替え、少しでも、人の役に立てる人間にな



山の奥地に隠れた樹の巨木を訪ねて、急勾配な斜面を登って歩く。これも空手の修行

ろうと立ち上がったんだよ。それはね、何も問題を抱えていない人間からすれば「最初から合理的にそうすれば良いじゃないか？」と思うかも知れない。だけれどもね、生身の人間はなかなかそうはいかないんだよ。例えば、事故や大災害で家族を失った人に「死んだ者はしょうがないじゃないか」とクールに言っても始まらない。しかしね、悩みに悩み、悲しみに悲しみを重ねた後で、自得して立ちあがった人間は絶対、以前にまして必ず何倍も強くなるはずだよ。

◆安全と危険

俺の「山の道場」のすぐ下の方には深



外国大空手家の指導に当たる岸信行

流が流れている。岩魚なんか泳いでいる。少し深い淵も何か所かにあるが、ほとんど浅瀬だ。川から顔を出した大きな石も幾つか見えていて、普通に考えれば、その石の上を跳んで向こう岸に渡ることも考えられるだろう。でも、それが危ないんだ。「浅瀬で落ちても大丈夫」そう思って石に跳び乗ったら、それがとんでもなく滑りやすい石だったり、流水の変化で石の底が前より緩くなっていることだってある。そこで滑ってひっくり返って大ケガをする。頭を打って死ぬことだってある。浅瀬だから川底に頭が直撃する。「浅瀬だから安全」のはずが「浅瀬だから命取り」になる。最初から「恐い」と思う所であればまず近づかない。

観光地の絶壁だってそうだよ。落ちたら死ぬというようなところには柵をしている。柵をしているから安全だ、と思

って寄り掛いたら柵が壊れていて、柵と共に奈落の底ということもある。俺が20年指導していたニューヨークは安全管理にはうるさい所で、道場生にケガなど何かあったら訴訟という所だったけれど、俺は逆に壁や柱に釘を一杯刺してサボテンみたいにしてやるうかと思つたね、実戦では常に背後が安全とは限らないからね。戦う相手だけ気にしていたら良いのは大会の相手。現実問題は、自分の周囲にも気をつけなければ戦えないからね。どこまで下がれるか、足場は大丈夫か、そういうことを配慮しながら戦うのが実戦だからね。正面の敵とだけ闘ってれば良い、場外に出たら審判達が笛で教えてくれるというのは大会の世界だからね。

道だつてそうだろう。道にデカイ岩が飛び出していたら、まず誰もけつまずかない。道の表面からほんの少しはみ出しような石に油断して、或いは気づかないで、けつまずいてひっくり返るんだ。空手の技もそう。空手には全ての技があるけれども、崩しの技だつて、ほんの少し或いは不意に出てくるから崩れるんだ。あつて、最初からデカイ技が出てきたら、そんなものには掛らない。俺は特別に人生の経験や研究をしているわけじゃない。全てを空手から学ぶんだ。

◆日々の鍛練

俺は朝からまず道場の全ての拭き掃除、それから技を千回単位で俺の手製の鍛練道具に突き込む。そして腕立て伏せ、腹筋、屈伸運動で午前中の稽古を終る。午後は自分自身の技を考案し続ける。古い本も読む。俺はその鍛練道具を土間に置いて1日何千本と突き込んでいるけれども、かなり固い物を叩いている。日本へ帰って来てから何百万回と叩いた。こ

う言えば、人は部位鍛練だと思ひ、「そんな部分だけ鍛えても仕方がない」と言うかも知れない。しかし俺はこの鍛練器具を打つ時には全身を意識して全身の神経を使って、全身のバランスを考えて一撃一撃を突いている。決して拳頭とか手刀とか、そういう部分だけを硬くしようとしていくわけではない。だから普通の砂袋を突く時でも、漫然と突くのではなく、いろいろな状況を想定して全身で突くという稽古をすることが必要だね。

「動かない物を叩いても仕方がない」という人もいるだろうけれども、だから、自分が小刻みに動いて位置を変えて叩くんだ。人間、やる前から四の五のと理屈ばかりこねていないで、工夫してみたら随分といろいろな鍛練ができるもんだよ。また俺の鍛練道具の一つに木刀がある。木刀と言っても、自分で削つた物で先が木の幹くらいに太く、握りの部分も随分と太く持ちにくい。何故そんな物を作るか。それは相手の腕を捕まえる時のため。パーベルやダンベルのシャフトは掌で握りやすく作られている。でも人間の腕は太い。その太さに対して力を発揮できるように鍛えておかなければ役に立たない。

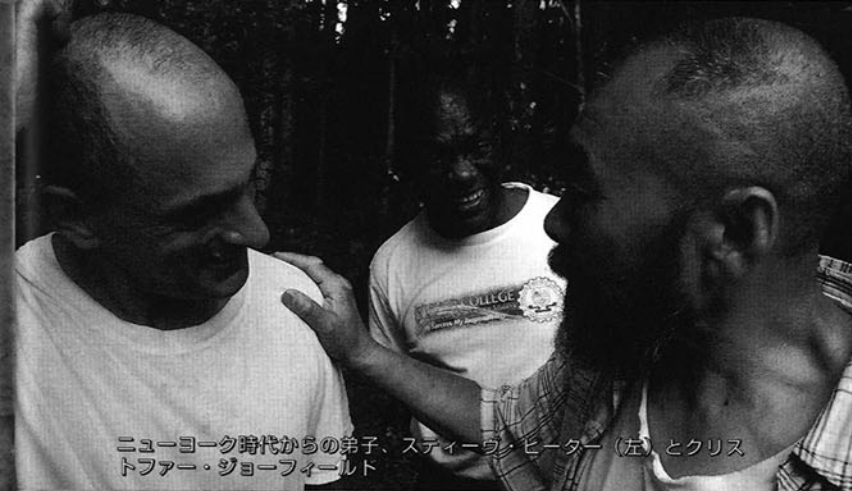
ベンチプレスもそう。腕や胸の筋肉や、いろいろな筋肉を発達させることはできるだろうが、シャフトが細く丸い。上げ下げに便利過ぎる。だから俺は河原から拾って来た人の胸ぐらいの太さはあるデカイ丸い石を上げ下げする。これは相手が前から来た時に止める力を発揮させやすくするため。デカイ丸い石はしっかりと支えなければ落としたりしやすい。指先の全てに神経を行き届かせるための俺の工夫だ。不便さを利用して鍛えるんだ。この前、アマゾン辺りで農園の開拓している全く知らない日本人から、俺のことが書かれた本を読んだとかで、電話が入って「自分は空手の道場に通えずに、本一冊

だけを頼りに稽古している」という話だった。俺は「それで十分だ」と話した。空手というのは本来、人間一人一人の体の中に入っているんだと思う。それを練り上げて、自分の空手を作っていくものだ。だから、道場へ通えないといつてもやる気になったら自分一人で相当の空手の稽古はできるものだ。

まあ世の中にはいろいろな流派があるようだけれど「これが岸流の空手だ」というような決まったスタイルは無いね。俺は空手の基本を教えるだけで、何年も道場生は泳がせておく、実に刺激のない道場かも知れない。空手というのはその人それぞれに合ったものであつて、外付けするものではなく、内面から練り出してくるものだ。大山倍達館長が「私は基本しか教えない。極意はそれぞれで掴むものだ」と仰っていたが、俺もそう思うよ。俺には俺の空手があつて、道場



岸信行直接指導のもとで空手の稽古。手刀頭打ち込み。前列左からニューヨークの本間雅彦、中村トリアート、下八木のクリストフ・フィールド



ニューヨーク時代からの弟子、スティーヴ・ライター（左）とクリストファー・ジョーフィールド



大自然と一体化した芦空手「山の道場」。宿泊する建物、物置小屋。広大な原野がそのまま道場だ。時折カモシカ、月の輪鹿も訪れるが、皆暗黙のルールを守って共存している

生には道場生の空手があったって、それぞれ違う。「皆違つて、皆良い」んだ。それでこそ自分自身の個性が発揮できて楽しいんじゃないか。学校の勉強も、日常の幸せも同じことで、外にある何かを掴もうとするより、自分の中から生み出した方が楽しいんじゃないか。

◆組手で学ぶ空手の生き方

組手というと、まあ、何でもありで、何をやっても勝つのが正しく実践的だと思われがちかも知れないけれども、俺は修行における組手に関してはそうだとは思わないね。もちろん、本当の実戦で実際にやらなければならぬ時には何でもやるし、俺もやったよ。でもね、普段における組手で、人の顔を叩いたり蹴ったりということはやっぱ人間としては失礼な話でね、人間の毎日の心の修行としてやらなくても良いことだ。「顔を叩けば脳が揺れて倒れやすい」とも言うけれども、「顔を叩かなければ倒れない」というものでもない。

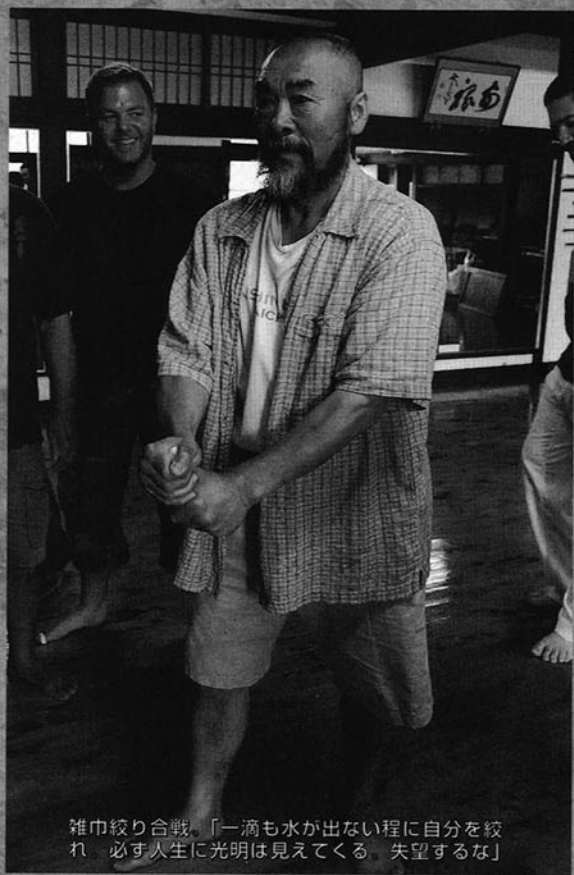
空手道の組手で鍛えるのは「人間の心」であり「生き方」だよ。戦いが怖くても相手の間合いに入る。そのことによって勝機を掴める。びくびく怯えているより、覚悟を決めた方が的確に動ける。用心と臆病は違う。自分が劣性になっても頑張る。諦めない。自分が優勢になっても調子に乗らない。幾ら自分が強くても、相手にやってはいけないことはやらぬ自制心。礼節。まとめて言えば「押忍の心」だよ。その生き方が育つだけでも空手をやって良いんじゃないか。

口では理想的なことは言えるよ。組手はそれを戦いの中で本当に実践するトレーニングを積むんだ。これは生きる上で力になるよ。つまり「実践空手」だ。まあ、空手というのは、もともとは戦いの技術ではあるけれども、俺は道場にお

ける組手というのはそういう「押忍の心」を涵養する、自然宗教的な、生き方を探求して鍛えるために、こうやって残ってきたもんだという気がするね。だから、ピストルや機関銃、核兵器或いは光線銃が出回る時代になるのが、空手の稽古や道場というものが人間にとって意味がなくなる時代は来ない。他人と比べて強い弱い、大会で優勝か準優勝か、そんなことは関係無いんだ。自分自身において強い自分に成長するかどうか、問題はそこなんだ。例え、勝負の形としては負けていても、最後まで心が折れないような人間は実社会では強いと思うよ。丈夫な人間なんだよ。「体で負けても、魂で負けるな。魂の強者になれ」。俺はそう思うね。

◆弱い人間が勝つ空手

「弱い人間が勝つ空手」と言うと、マジックみたいな都合の良いことを言つて空手を売り込もうとしているように聞こえるかも知れないが、これは違う。強い人間が勝つのは大会の空手。空手というのは、沖縄で禁武政策が敷かれて武器を取り上げられた弱い立場の人間が「いかにして強敵に勝つか？」という発想から生まれた武術。だから、卑怯もへつたくれもない。相手を言葉や行動で当惑させるのもあり、狂人の振りをして不意を突くのもあり、例えばそれでもし命が助かるんだつたら、拳銃の銃口を「まあ、美味しそうなフルーツ」と聞いて吸いついても良い。相手が腰を抜かすかも知れないよ。全てあるのが空手だ。稽古でどんな考えたら良い。幾らアイデアを考へても税金はかからない。パワーが無ければ大男に勝てないと思つたら大間違いだ。酒を飲みながらアメリカの本間の所の道場生達に狐拳の試し割りを見せなければ、割れば六本折る技があれば、敵の鼻の骨は折れる。だからデカイ男が襲い



雑巾絞り合戦。「一滴も水が出ない程に自分を絞れ 必ず人生に光明は見えてくる。失望するな」

かかって来たら、無構えのまま裏拳や狐拳で相手の急所である金的を打って、その裏拳や狐拳で相手の鼻柱を打つことができればまず相手から逃げられる。そういう意味で、空手は弱い人間が強い人間に勝つチャンスを生み出す武術でないとダメだ。ノールールの実戦の中では「術」が意味を持つてくるケースもより多い。空手をやる者は、生き方はどこまでも誠実であって欲しいけれども、実戦における技はどこまでも卑怯で良い。その動機が生きたためであればね。語弊を恐れずに言えば、緊急時において「卑怯は弱者の正攻法」なんだ。「強者の正攻法」に合わせたら弱者は負ける。

「本間よ、みんなを頼むぞ。日本を背負って行け！」

その動きを隠したとも言われる。大の男、武器を持った人間に襲われた時、女性でも老人でも自分の身を守る可能性のある技、これが無ければ空手とは言い難い。前に道場生の黒帯の佐藤徳雄が道場で飛んだり跳ねたりして蹴りの稽古をやっているから、「何やってるんだ？」と聞いたら、佐藤は「体のデカイ人を倒すために顔を蹴る稽古をしているんです」と言う。俺は「お前、随分物知りだね。サーカスへでも行くんだったら良いけど、デカイ奴倒すんだったら踵で相手の足の親指の付け根をいきなり踏みつけば良いだろ！」と言った。普通、大会では使われない。でも女性が痴漢に襲われた時にハイヒールで痴漢の足を踏んつけたら有効な技になる。昔、アメリカでレイプ対策に入門してくる女性も多かった。そんな真剣な動機に込めるためにも、俺は「生きるための空手」を真剣に考えるわけだ。まあ、だから、岸の道場で空手を練習したら生きる役には立つだろうけれども、どこかの大会に出場して優秀な成績を修めようなんてのは無理だね。

◆貧困という修行

俺の本格的な空手の旅は20歳頃家出して、東京の極真会館に入門したところから始まっているけれども、振り返ってみれば、仏教で言う「前行」が山形にはあった。前行というのは、密教などで本格的に教えを受ける前に、自分自身の心身を鍛えることらしいけれどもね。それが運命の導きだったね。俺が極真会館の空手修行に耐え抜けたのも、アメリカの恐ろしい環境の中で空手の指導をやり抜けたのも、それ迄の親と故郷の厳しさがあったからだ。今となってはありがたいことだよ。故郷の山形の冬は厳しかったけれども、温かい春は必ずやってきた。どれだけ厳しい時があっても、必ず笑える

日が来る。これが俺の人生観になった。厳しい冬に厳しい親。農作業に建設作業にアルバイトに学校で、中身が恥ずかしくて人前で弁当箱が開けられない位の貧困生活。これが俺を鍛えてくれたね。とんでもない貧乏と重労働、これが俺にとって「空手の前の空手」だった。親父は「空手なんて、そんな飯の食えねえことすんな！」と言って、俺をこき使ったけれども、これこそが、俺が空手家になるための下地を作る確かな「前行」だったわけだな。当時「五百人に一人しかかない」と言われた極真会館の黒帯に、俺は2年でなれたけれども、それはこの「前行」があったからだ。俺は今、悩んでいる人間には「空手の修行だと思えばどうってことない！」と言う。今も貧困や厳しい生活環境に悩んでいる人はいるだろう。でも「それだけ鍛えられている」と思えば、これまたありがたいこと。今、とんでもなく、苦しい思いをしているのは、破壊のためじゃないんだ。生きていく限りは将来に素晴らしいことがあるための苦しみなんだ。物事は捉え方ひとつ。死にたくなくなるような日が続いても、耐えて生きて行けば急に晴れ間が広まることもある。そこまで、耐えて生きて行かないといけない。俺は東京へ家出した後、最初はアパートを借りていたけれども、家賃が払えなくなると追い出された。それで俺は働いていた印刷会社の社長に頼んで屋根裏に住まわせてもらった。カビは生えているし、ネズミも同居の屋根裏。その頃、山形から俺の弟の靖徳が来て俺のその住まいを見て「あんつあー！これが家を捨ててまで、あんつあがやりたかった夢か？

アパートまでおん出されて、こんな姿、親に見せられっか？」と泣いた。俺は「うるさい！いつか花咲く時が来る！」と言った。そうこうしているうち、大山倍達館長が「岸君、もう仕事やめなさい！私が面倒を見る！これからは24時間空手だけやいなさい！」と言って俺を内弟子にして下さった。俺は世界一の大山館長に拾われた。ありがたかったね。春の到来だった。ただ自分は家を捨ててきた、家に迷惑を掛けている。取り分け、弟の靖徳には長男の役割を背負わせることになった。申し訳ない、そのことはいつも心にあった。

アメリカでは道場破りの脅迫電話というのもよくあった。「これからピストルで殺しに行くから」と言うから、俺は

稽古の後は皆で食事をする
「空手家は人間でなければいけない 他人の喜びは自分の喜び、他人の悲しみは自分の悲しみ」

◆悩みと空手

俺の道場生は、人生に悩み、病に襲われ、葛藤しているような人が多い。病院の先生と患者が多い。医者も患者の命を預かることには大きな精神的な負担があるんだな。俺みたいなへそ曲がりでも、病や心の深刻な悩みを持った人には真剣になる。道場が病院みたいになっちゃう。俺は医者じゃないから空手を教えるだけだけどね。「医食同源」というが「医武一如」でもあると思う。空手で心身が健全になれば、病や障害は空手に追いやられて姿を消していく。今、脱法ドラッグとか変な薬で精神的な快楽を得よう、不安から逃れようという傾向が日本でも顕著になっている。しかしそれが何の解決にもならないのは、俺がアメリカを見てきて実感した。俺は日本に帰って来てからもその危険性を言い続けてきたが、日本でも現実になってきた。薬物中毒患者の車が暴走事故を起こす事件とかあるよね。俺はおかしな事件を耳にすると「その根底に薬物があるんじゃないか？」とすぐに思う。

「早く来いよ！俺の部屋の電話番号知っているんだから、住所わかっているんだろ？」だけど、気をつけるよ。俺のアパートが幾ら安くてほろいと言っても、部屋が四つあるんだ。お前、気をつけて入らないと、お前の入った部屋の横からお前を殴り殺すぞ！」と言ったりしていた。実際のところ、こんな脅迫電話で恐くなってドラッグや酒に走っておかしくなる空手家もいる。人間、覚悟を決めることも大事。だけれども「俺は死ぬ覚悟を決めたから、もう何もしない」ではなくて、覚悟を決めて、己を鍛練して日々を生きる。それが大事。死ぬ覚悟ぐらい誰でもするよ。覚悟を決めてどう対処していくかが大事だね。

アメリカでも麻薬中毒患者が暴れまわって、それを取り押さえるのに、大の男が三人で殴る蹴るしていたことがあった。ボキッボキッと骨が折れる音がしても患者はゲラゲラ笑っていた。幻覚症状を起こした人間は身の周りで実際には起こっていない光景が目の前で起こっているようにはっきりと見えるらしい。だから「自分は殺される」と幻覚を見れば、逆に他人を殺そうともする。ニュース映像なんかで、外国の警察官がよってたかって麻薬中毒患者に暴行を加えているように見えても、外国の警察官も必死だよ。麻薬中毒患者は何をするかわからないからね。僅か数十秒程度のビデオを観て「警察官が面白がって容疑者をリンチしています。人権蹂躪です」なんて単純に

思ったら大間違いだよ。薬物依存症になり、苦しい禁断症状を起こすようになれば、薬欲しさのたうちまわる。薬を得るためなら何でもするようになる。人生の不安を抱えた人も薬を頼るより、まず本当の空手をやった方が良さんだ。まあ、空手と言えは、「戦いに強くなる」ということを考える人は多いけれども、病や悩みにも、本当の空手、自分自身の空手を修行した方が良さんだ。

◆選手と空手家

俺も大山館長の命令で大会には選手として出たことはあるけれども、厳密には「選手と空手家は違う」と思うね。空手家は自然で社会と調和し一生続けて行けるものだ。また、他人との勝ち負けも俺は関係ないと思う。自分自身を開花させるものだ。選手が悪いとは俺は言わないし、大会の選手として競い合いたいとい

う人はそれをやれば良いけれども、決められた時間とルールの中で他人に勝つために、自分自身の体を異常なまでに酷使することがある。心肺機能にも負担を掛けるし、高い蹴りをやるために随分と足腰に無理をさせる。それでは歳を取って体にガタが来る。実際に俺はそういう人を何人も見ているからね。膝の皿でサンドバッグを蹴る。これも膝の関節には随分と悪い。岸道場ではランニングもやらない。ランニングすると重心が浮くからね。相撲の世界だって走らないでしょ。だけど強いスタミナもあるからね。俺もね、正直なところ、大会ブームの黄金期の頃、周りの人がほとんど大会向けの修練をし、優勝し、華やかになって、組織を作っていく姿を見て、「俺自身は本当にこのままで良いのかな」と思い悩んだ時期もある。しかし、あれから40年が過ぎ、俺は今、何はなくとも、元気で澁刺な生活ができて、空手に燃えている自分自身を考えると「俺の考え方も間違っ



協力してくれる人があってこそ、空手の稽古に邁進できる



試合の空手だけではなく、奥義の武道を学ぶ所、それが岸道場だ

てはいなかったな」と思うよ。健康な体にわざわざ障害をもたらしたり、寿命を縮めるような空手を見て、普通の人はやりたいとは思わないよ。人間は空手をやることで、健康で長生き、そして幸福を感じられるような体にならなくてはダメだ。

◆自分の中の宝物 ——禅ということ

人間の一人一人の体は宝蔵だ。自分の体の中には他人が盗もうとしても盗めない、宝の種が詰まっている。他人の宝蔵の宝の種を盗もうとしても無理。他人との比較はやめて、自分という恵まれた存在に気づくところに「不動心」はある。あっちこっち見て、ころころとしている内は心が転がったままだ。自分が自分であること、自分に与えられた宝があることに感謝できるようにしたら自分の心は落ち着く。

禅というものがある。俺も真夜中の山の道場で禅を組むことがある。禅は自身自身の命の中にある宝探しをすることなんだな。漢字で「禅」というのは「単を示す」と書く。俺には難しい禅の教義はわからないが、宇宙に自分しかないものを示す、という意味もあると思う。自身自身の持っているものは何なのか、それを探す作業。

俺はある意味で「自由主義者」だ。「自分勝手」という意味ではない。自分であるが故「理由」に基づいて行動するということ。何か問題を解決したり、進路を決定するのに、他人に「どうしたら良いですか?」と聞いて回る人が多いけれども、最後は自分が決めることだ。他人の意見を聞いて失敗したら、「あなたのせいだ」というのか。そんな馬鹿な話はないよ。俺は人間がいろいろな基準を勝手につけて「ダメな奴」だとか判断するのは嫌いだね。天が生み出したそれぞれの人間にはそれぞれの個性があり使命がある。それをただかたかた人間が同じ人間をふるいに掛けて優劣をつけるなんていうのは、傲慢もいいところだ。まあ、

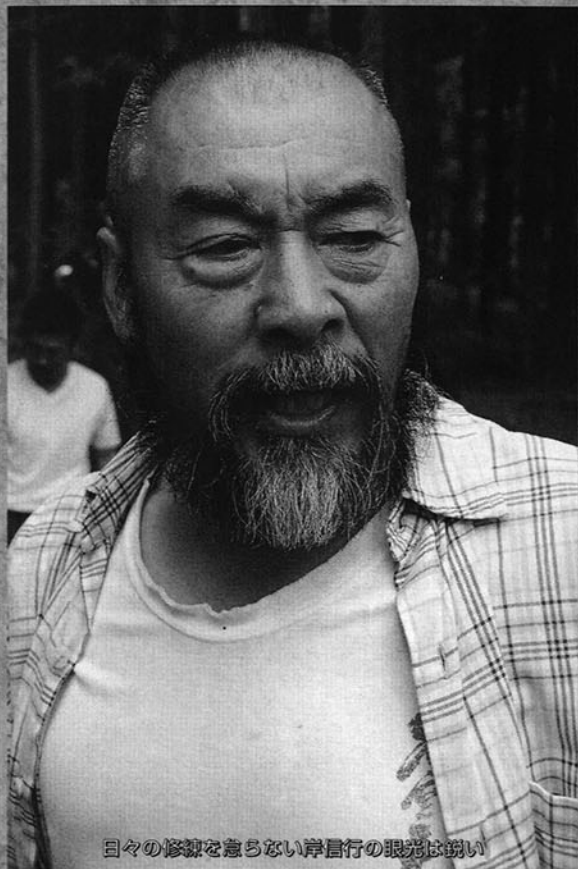
今、引きこもりだが、不登校だとか、いろいろと自分自身の生き方にけつまずく人間がいるようにだけれども、俺は人間が小賢しく引いた線引きが、こういつた人間を苦しめているんだと思うね。「もっと自分を楽しむ生き方をするべきだ。自分を喜ぶべきだ」と俺は言いたいね。

◆5日間の桜花

人間は不思議で、強さと丈夫は違うもんだ。強くても脆い。弱くても丈夫ということがある。「いじめられている」ということは、言ってみれば弱いということだろう。しかし、それで「へこたれない」ということは、丈夫ということだ。普段は強そうにしているが、何かがあった時にはすぐに崩れてしまう、これは脆いということだ。ハンディキャップや悩みを抱えていたり、貧しかったりする人間は、世の中で言う、優れているとか強いということとは違うかも知れない。だけれども、それでも誠実な人生を貫き通せるということは、丈夫だということだ。成功者や有名、社会的な強者が少し人



本間雅彦と空手を闘り合う



日々の修練を怠らない岸信行の眼光は鋭い

生で失敗したり批難を受けると、すぐに崩れて自殺する者もいる。これは「強いが脆かった」ということ。今、いじめで中学生や高校生が命を絶っているという。「いじめられている自分は弱い」と思うより、「それでも生きていく自分は丈夫だ」と誇りを持って欲しいね。そして自分に与えられた命から人生の宝を見つけて好きなことをやろう。俺は今、この大宇宙の中の分身として、岸信行という個体を生きている。岸信行という生命体が、俺の命の最初で最後ではないだろう。恐らくはこの大宇宙の誕生から終わりまで、俺は生まれ変わり死に変わり繰り返して、俺の魂、命は延々と続いて行くのだろう。そう考えた場合、人間の一生とは1年でたった5日咲く桜のようなものかも知れない。1年の365分の360の割合を、大宇宙の中で人間として咲くその時を待ち、今この世に生きる人間は誰もが「僅か5日の桜花」なのかも知れない。ぼやぼや、うじうじ、くよくよしている時間は無い。何を恨もう、何を悲しもう、たった5日潔く咲いて散る桜のように、俺の信じた人生を堂々と生きたい。

世界を空手で行脚した岸信行の道場に、今多くの人々が空手の源流を求めて訪れる

月刊

フルコンタクト KARATE

2013
No.318
FIGHTING
SPIRITS
MAGAZINE

8
AUGUST

定価 760 YEN



**BRUCE
LEE
REBOOTS!**
ブルース・リー
没後40周年
40年目の新情報!?

ベトナム武術
ボビナムの深奥